【　新人所員紹介　】

英語英文学科　助教

栗田　梨津子

専門は文化人類学ですが、これまで言語と文化、アイデンティティとの関わりに関心をもってきました。大学院時代には、オーストラリアの都市に居住する先住民のアイデンティティの諸相に関する研究を行う中で、消滅した先住民言語の復興が人々のアイデンティティに与える影響について考察しました。そこで、白人の言語学者が中心となって再構築された先住民言語は、一部の先住民にとってアボリジニとしての精神的拠り所となる一方で、普段アボリジニ諸語と英語の混成語である「アボリジニ英語」を用いて生活している大半の人々にとっては外国語に等しく、必ずしもアイデンティティの拠り所とはなり得ていなかったことがわかりました。

現在は、多文化社会オーストラリアにおけるシティズンシップ（市民意識）と英語の関係に興味をもっています。近年のオーストラリアでは、文化的多様性よりも英国的価値観に基づくシティズンシップが強調され、市民であることの基準として英語力が以前にも増して重視されるようになりました。そして、新たに市民権を申請する移民や難民に対し、大学レベルの英語力を求めようとしています。このような状況において、エスニック・マイノリティの人々が高度な英語を身につけることが、実際に同国の一員として受け入れられ、オーストラリア市民としての帰属意識をもつことにつながるのかといった研究を進めていきたいと考えています。

中国語学科　助教

秋山　珠子

専門は現代中国の視覚芸術です。 近年はとくに、国の検閲を通さずに個人ベースで製作され、その自由で多彩な表現で世界的に注目されるインディペンデント・ドキュメンタリー映画についての研究と字幕翻訳を手がけています。

高校までは理系、大学学部では日本文学科に進み、大学院時代は中国現代思想を研究するという、興味対象が拡散しがちな私にとって、多様な切り口と芸術的手法を持つドキュメンタリーは、尽きせぬ魅力を提供する研究対象です。埋もれた歴史への想像を誘う叙事詩のような作品（王兵『鳳鳴』）、環境汚染の実態を丹念な取材と巧みな画面構成で捉える作品（王久良『ゴミの城壁』）、自然とともに生きる少数民族の親子を一幅の山水画のような詩情で描く作品（和淵『アプダ』）…。国際映画祭での受賞が相次ぐこれらの作品群が、イリベラルな社会において生産され続けるダイナミクスを解明することと、字幕翻訳の実践を通して、時間芸術である映画を翻訳することの制約と可能性について考察することが、現在の研究の２本の柱となっています。

着任後、海外から監督・研究者を招いた講演会を企画し、学内の多様な分野の専門家にご参加いただきました。いよいよ興味対象が拡散しそうですが、異なる視点から研究対象を捉える契機をいただけることを今後も楽しみにしています。